# 高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華厳経をめぐって

榎木久薫

目次

はじめに
一、奥書による音義と点本との関係推定
二、先行研究における僚巻の推定
三、加点字による検討
三・一　点本と音義における加点字の有無に基づく検討
三・二　点本と音義における加点の差異に基づく検討
まとめ

## はじめに

高山寺華厳教学集団によって加点された華厳経字音点は、鎌倉時代の漢字音（特に呉音系字音）の研究資料として極めて貴重な資料と思われるが、今日までほとんど利用されていない。また、華厳経を字音直読する学問形態は高山寺教学集団によってはじめて出現したものと考えられており、[1]そのような新しい学問形態を反映したものとしても重視すべ

きものと考えられる。本稿は高山寺蔵華厳経字音点の内、寛喜に加点されたと推定される諸巻を取り上げ、基礎的な整理を加え、今後の研究に資することを目的として草するものである。

## 一、奥書による音義と点本との関係推定

高山寺蔵『新訳華厳経音義』と高山寺蔵『大方広仏華厳経（新訳八十巻本）寛喜元年点』との関係については、既に沼本克明氏に御指摘がある。[2] 要約すると次の様なものである。

『新訳華厳経音義』（以下『音義』と略称することがある）は次に示した奥書に見られるように、喜海によって嘉禄三年に両三本の音義を参照しつつ作成され、安貞二年に書写され、寛喜元年八月に二度校合されている。

『新訳華厳経音義』

（本奥書）

嘉祿三年丁亥六月二日酉刻於西山／梅尾之禅房集兩三本之音義／抄寫之偏為自行轉讀敢不／可及外見矣

花厳宗沙門喜海

（追筆）

交了

（別筆）

寛喜元年八月十八日与／五六輩交合再治了／寛喜元年八月廿七日子剋／點并假名數度交檜畢

（裏表紙内）

安貞二年四月廿四日於高山寺草室書寫了

これに対して、『新訳華厳経寛喜元年点』（以下『点本』と略称することがある）は、次に示した巻第三十四・三十五・四十

四の奥書から、この音義を参照して難字に対して加点されたものと推定される。

『新訳華厳経寛喜元年点』

〔巻第三十四〕

（奥書）（別筆）「校了」

寛喜元年九月十七日於竹内之房以御堂之本／重交之畢／并難字付假字了／小比丘了弁」

「校了」（以上二字擦消）（「校了」ノ字ハ「寛喜元年」ヨリモ以前ノ字ナリ）

〔巻第三十五〕

（奥書）寛喜元年九月十九日於高山寺又校合了／又以音義付假名了　勤杲

（追筆）「校了」

〔巻第四十四〕

（奥書）寛喜元年十月四日以御堂之本奉校即／以音義點了　西谷小僧空弁

沼本氏は『点本』の巻四十四について、実際に『点本』と『音義』との加点された漢字を比較しておられる。(3)

## 二、先行研究における僚巻の推定

現在高山寺に所蔵されている大方広仏華厳経には数具あり、それらが幾つかの函に散在している。本来どれどれが僚巻として一具をなすものかについて、沼本克明氏(4)と奥田勲氏(5)によって推定がなされている。〈表1〉は、そのうち寛喜に校合加点されたものと推定された巻について、二氏の推定された函架番号・声点の種類・僧侶名・寛喜の年記・他の年号の年記と僧侶名を一覧としたものである。表中、十函六号・十函七号・十函八号を奥田氏はそれぞれ巻第十一・巻第十二・巻第十三と推定しておられるが、原本および目録を見るとそれぞれ巻第十・巻第十一・巻第十二であるので、そ

のように訂正した。また、巻第三十五は沼本氏と奥田氏とで推定が異なる。このうち、十函十九号は『高山寺経蔵典籍文書目録第二』[6]においても巻第三十五となっているが、大正新修大蔵経の本文と対照させてみると巻第四十五の内容であるので、そのように扱った。なお、沼本氏が巻第三十五と推定しておられる五十八函一号は、巻尾のみの断簡である。次に声点の欄で、朱墨と記している巻第六および巻第七十八の声点は墨の上に朱を重書したものであり、他の朱・墨と記している巻は朱点と墨点とが混在している巻である。また、声点の欄が空白のものは振り仮名も含めて無点の巻である。

〈表1〉で寛喜の年記のある巻について奥書の日付を見ると、おおむね巻第六十七から巻第八十までの最後の十数巻を先ず校合加点し、その後、巻第一から巻第六十六までを順次校合加点したものと見ることができる。ただし、他の寛喜の年記のある巻がすべて元年であるのに対して、巻第三十のみ寛喜二年の年記である。

また、寛喜の年記のない巻も含めて、奥書に特定の僧侶名が連続して現われることがないので、数巻ずつ分担して校合加点したのではなく、若い巻次から一巻ずつ順番に取り上げ校合加点していったものと思われる。

〈表1〉

| 巻次 | 沼本 | 奥田 | 声点 | 僧侶名 | 寛喜年記 | 他年号年記・僧侶名 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 10-1 | 10-1 | 朱 | 良照 | | |
| 三 | 10-2 | 10-2 | 朱 | 圓辨 | 元年九月七日 | 嘉禎二年正月十五日・円弁 |
| 四 | 10-3 | 10-3 | 朱・墨 | 淨弁 | | |
| 六 | 10-4 | 10-4 | 朱墨 | | | |
| 七 | 10-5 | 10-5 | 朱・墨 | 淨照 | 元年九月八日 | |
| 九 | 8-5 | | 朱・墨 | | | |
| 十 | 10-6 | 10-6* | 朱 | 了弁 | 元年九月十日 | 嘉禄元年八月十六日・行寛 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十一 | 10-7 | 10-7* | 朱 | 勤杲 | 元年九月十一日 |
| 十二 | 10-8 | 10-8* | 朱 | 親玄 | |
| 十三 | 8-6 | | 朱・墨 | 了弁 | 元年九月十一日 |
| 十六 | 10-9 | 10-9 | 朱 | | 元年九月十一日 |
| 十七 | 10-10 | 10-10 | 朱 | | 元年九月十三日 |
| 十八 | 10-11 | 10-11 | 朱 | 高信 | 元年九月十一日 |
| 二十一 | 10-12 | 10-12 | 朱 | 長眞 | |
| 二十二 | 10-13 | 10-13 | 朱・墨 | 長円 | 元年九月十三日 |
| 二十四 | 10-14 | 10-14 | 朱・墨 | 定弁 | |
| 二十五 | 10-15 | 10-15 | 朱・墨 | | |
| 二十七 | 10-16 | 10-16 | 朱・墨 | 圖辨 | 元年九月十六日 |
| 二十八 | 10-17 | 10-17 | 朱・墨 | 淨弁 | |
| 二十九 | 8-23 | | | | |
| 三十 | 204-13 | | 朱・墨 | 慈弁 | 二年一月廿五日 |
| 三十一 | 8-4 | | | 淨弁 | 元年九月十七日 |
| 三十四 | 10-18 | 10-18 | 朱・墨 | 了弁 | 元年九月十七日 |
| 三十五 | 58-1 | 10-19* | | 勤杲 | 元年九月十九日 |
| 三十六 | 10-20 | 10-20 | 朱・墨 | 親玄 | |
| 三十九 | 10-21 | 10-21 | 朱・墨 | 成忍 | |
| 四十一 | 10-22 | 10-22 | 朱・墨 | 尊弁 | 元年十月四日 |
| 四十三 | 204-9 | | | 了性 | 元年十一月十二日 |
| 四十四 | 10-23 | 10-23 | 朱・墨 | 空弁 | 元年十月四日 |
| 四十五 | | 10-19* | 朱・墨 | 長眞 | |
| 四十六 | 10-24 | 10-24 | 朱・墨 | 長円 | 元年十月七日 |
| 四十八 | 10-25 | 10-25 | 朱 | 定弁 | |

寛元三年八月十六日・高忍　正安四年六月廿三日・朝玄

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 四十九 | 10-26 | 10-26 | 朱・墨 | 良照 |
| 五十 | | 8-2 | | |
| 五十一 | 8-7 | | | 円辨 |
| 五十二 | 8-8 | | | 淨弁 |
| 五十四 | 10-32 | 10-32 | 朱 | |
| 五十五 | 204-10 | | 朱・墨 | 淨照 |
| 五十六 | 10-27 | 10-27 | 墨 | |
| 五十七 | 10-28 | 10-28 | 朱 | |
| 五十八 | 10-29 | 10-29 | 朱・墨 | 賢快 |
| 五十九 | 10-30 | 10-30 | 朱・墨 | 親玄 |
| 六十 | 10-31 | 10-31 | 朱・墨 | 尊弁 |
| 六十一 | 10-33 | 10-33 | 朱・墨 | 了性 |
| 六十二 | 10-34 | 10-34 | 朱・墨 | |
| 六十三 | 8-9 | | | 長円 |
| 六十四 | 10-35 | 10-35 | 朱・墨 | 良照 |
| 六十六 | 10-36 | 10-36 | 朱・墨 | 昭快 |
| 六十七 | 8-10 | | | 了弁 |
| 六十九 | 8-11 | | | 勤杲 |
| 七十一 | 10-38 | 10-38 | 朱 | 成忍 |
| 七十二 | 204-12 | | 朱・墨 | 尊弁 |
| 七十三 | 8-12 | | | 尊辨 |
| 七十四 | 8-13 | | 朱・墨 | 高信 |
| 七十五 | 8-14 | | 朱・墨 | 了性 |
| 七十六 | 8-15 | | 朱・墨 | 空弁 |
| 七十七 | 8-16 | | 朱・墨 | 長眞 |

嘉禄元年八月十六日・行寛

元年十月廿一日
元年十月七日
元年十月四日
元年十一月九日
元年十月二日
元年十月四日
元年十月九日
元年十一月廿三日
元年九月三日
元年九月三日
元年九月四日
元年九月五日
元年九月五日
元年九月五日
元年九月五日

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 七十八 | 10-39 | | 長圓 | 元年九月五日 | |
| 七十九 | 8-17 | | 行恵 | | |
| 八十 | | | 定弁 | | 嘉禄元年八月十六日・行寛 |
| | 10-39 | 朱墨 | | | |
| | 8-3 | 朱・墨 | | | |

## 三、加点字による検討

筆者は、現在沼本氏の推定と奥田氏の推定とで重なる巻について原本の加点字についての調査を終えた。そこで本稿では、各巻の加点状況の面から僚巻の推定について検討を加え、今後の調査と字音の性格についての考察の指針を得ることとしたい。

### 三・一　点本と音義における加点字の有無に基づく検討

無点の巻を除くと、各巻には墨の字音振り仮名と朱の声点・墨の声点とがある。声点については、巻によって朱点しかない巻と墨点しかない巻、朱・墨両方の声点のある巻、また墨の上に朱の声点を重書した巻とがある。しかし、各巻の奥書にこれらの声点と字音振り仮名との関係を示す記事は見られない。

ただし、先に述べたように巻第三十五・四十四の奥書より、『点本』において加点されている字で『音義』に掲出されている字は寛喜の加点と推定される。そこで、各巻の加点字について『音義』と対照させ、有無を明らかにしたものが〈表2〉である。

用例の扱いについては、まず『点本』および『音義』において多くは二字以上連続して加点されているが、これらは一つの単位とみなし、便宜的に一字相当として扱った。また、次の様な場合は、『音義』あるいは『点本』にない字とし

〈表2〉

| 巻次 | 朱声点加点字 音義字 | 朱声点加点字 音義外字 | 墨声点加字 音義字 | 墨声点加字 音義外字 | 朱墨声点加点字 音義字 | 朱墨声点加点字 音義外字 | 点本外字 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 24 | | | | | | 1 | |
| 三 | 10 | 85 | | | | | 3 | |
| 四 | 8 | 2 | | 37 | | | | |
| 六 | 1 | | 3 | | 10 | 1 | | |
| 七 | 6 | | | 4 | | | 1 | |
| 十 | 16 | | | | | | 1 | |
| 十一 | 11 | 1 | | | | | 2 | |
| 十二 | 32 | | | | | | 1 | |
| 十六 | 15 | 1 | | | | | 1 | |
| 十七 | 20 | | | | | | | |
| 十八 | 5 | 21 | | | | | 1 | |
| 二十一 | 25 | | | | | | 1 | |
| 二十二 | 25 | | 1 | | | | 4 | |
| 二十四 | 12 | | | 4 | | | | |
| 二十五 | 30 | 2 | | 10 | | | | |
| 二十七 | 25 | 6 | | 15 | | | | |
| 二十八 | 13 | 2 | | 9 | | | 2 | 途中欠 |
| 三十四 | 15 | 41 | | | | | | |
| 三十六 | 19 | 14 | | 10 | | | 2 | 途中欠 |
| 三十九 | 12 | 3 | | 15 | | | | 途中欠 |

| 合計 | 七十八 | 七十一 | 六十八 | 六十六 | 六十四 | 六十二 | 六十一 | 六十 | 五十九 | 五十八 | 五十七 | 五十六 | 五十四 | 四十九 | 四十八 | 四十六 | 四十五 | 四十四 | 四十一 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 596 | 8 | 7 | 10 | 32 | 21 | 21 | 2 | 28 | 30 | 27 | 14 | | 3 | 6 | 18 | 6 | 29 | 7 | 3 |
| 212 | | | 4 | 9 | 1 | 1 | | 2 | 5 | 2 | | | | | | 1 | 6 | 2 | 1 |
| 9 | | | | | | | | | | | | 4 | | | | | | 1 | |
| 258 | | | 4 | 17 | 12 | 7 | 4 | 14 | 11 | 15 | | 7 | | 2 | | 2 | 38 | 11 | 1 |
| 41 | 29 | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | |
| 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 52 | 4 | 2 | 11 | 1 | | | 2 | | 4 | | | 6 | | | | | 1 | 1 | |
| | | 途中欠 | 巻尾欠 | | | | | | | | | 途中欠 | | | | | | | |

ては扱わなかった。

二字以上の連続で一部の漢字のみ振り仮名・声点がない場合

振り仮名か声点の一方のみがない場合

振り仮名か声点が一致しない場合（両方とも一致しない用例はなかった）

〈表2〉よりまず分かることは、例外的な巻を除くと、朱声点加点字には『音義』にある字（以下音義字と略称することがある）が多く、墨声点加点字には『音義』にない字（以下音義外字と略称することがある）が多いということである。このことは、朱声点加点字は『音義』を参照しつつ加点されたもの、墨声点加点字は『音義』を参照することなく加点されたことを示すものであろうということである。なお、後に詳しく述べるが、音義字とした用例で、『音義』と『点本』の間で声点・振り仮名に有無や差異のある用例はごく少数である。このことより、朱声点加点字は全体として寛喜の加点と考えてよいであろう。また、その加点の際には、朱声点と同時に墨による字音振り仮名も加点されたものと考えられる。

これに対して、墨声点加点字の加点時期が問題となる。朱声点加点字と墨声点加点字とがある巻では、墨声点加点字で音義字はごく少数である。このことから、墨声点加点字は寛喜の加点の後に加えられたものと考えられる。寛喜以降の年記のある奥書としては、次の各巻のものがある。

〔巻第三〕

（奥書）寛喜元年己丑九月七日校合了　圓辨

（別筆）「嘉禎二年丙申正月十五日又重校點了　円弁」

〔巻第十〕

（奥書）（別筆）「一交了」

嘉祿元年乙酉八月十六日甲辰於梅尾神殿寶前／開題供養即限永代安置當社此恵業／生々世々値遇于大乘在々處々隨順于聖人／終得菩提必導群生耳／權少僧都行寛

（又別筆）「一交了」

（又々別筆）「寛喜元年九月十日以御堂之本／重校之了　了弁」

〔巻第三十〕

（奥書）寛喜二年正月廿五日夜寅尅一交了／慈弁

（別筆）「寛元三年八月十六日難字之假名付之了／高忍」

（又別筆）「正安四年壬寅六月廿三日於高山寺住房切句并／□交點等已了　朝玄」

〔巻第五十〕

（奥書）（別筆）「一交了」

嘉祿元年乙酉八月十六日甲辰於梅尾神殿／寶前開題供養即限永代安置當社／願以此恵業生々世々値遇于大乘在々／處々隨順于聖人終得菩提必導群生／耳　權少僧都行寛

〔巻第八十〕

（奥書）（別筆）「一校了」（又別筆）「重交了　定弁」

嘉祿元年乙酉八月十六日甲辰於梅尾神殿寶前／開題供養即限永代安置當社願以此恵業／生々世々値遇于大乘在々處々隨順／于聖人終得菩提必導群生耳／　權少僧都行寛

まず、巻第十・五十・八十に見られる嘉祿（一二二五～一二二七）は寛喜（一二二九～一二三二）より前の年号であり、また、別筆で寛喜の奥書のある巻第十を除いて、嘉祿の年記のある巻は無点のものばかりである。一方、嘉禎（一二三五～一二三八）の年記のある巻第三は朱声点のみである。後に述べるが、例外的に朱声点加点字の多くが『音義』にない巻が、

巻第三を含めて四巻ある。巻第三の奥書の記事から見て、朱声点の音義外字はこの時の加点である可能性がある。これに対して、巻第三十の奥書の記事から、墨声点加点字は寛元（一二四三～一二四七）か正安（一二九九～一三〇二）の加点である可能性がある。

以上『音義』に掲出されている字の『点本』における有無の観点から見たが、逆に『点本』になく『音義』にある字（以下点本外字と略称することがある）について見ると、ほとんどの巻において、そのような字は無いかあってもごく少数であることが分かる。このことは、寛喜における第一次の加点において『音義』が参照され、『音義』にある字は洩れなく加点するという加点態度であったことを示すものと考えられる。なお、備考に記したように巻の途中や巻尾に欠落のある巻では、点本外字としたものも、欠落部分に存在した可能性がある。ただし、巻第五十六は点本外字が六例あり、また声点はすべて墨点であって朱点がなく、墨声点加点字は音義字より音義外字の方が多い。この巻には奥書に次に示すように年記・人名ともになく、寛喜加点本として一具のものとみなすべきでないかも知れない。

〔巻第五十六〕

（奥書）一交了

次に、朱声点が加点されていながら、『音義』にない字の多い巻についてみる。巻第三・十八・三十四・三十六は全体的な傾向に反して朱声点加点字に音義外字の多い巻である。ただし、これらの巻でも点本外字はほとんど見られない。このことから、朱声点の加点は『音義』を参照しつつなされ、更に『音義』にない字にまで加点したものと考えられる。各巻の奥書は次の通りである。

〔巻第三〕

（奥書）寛喜元年己丑九月七日校合了　圓辨

（別筆）「嘉禎二年丙申正月十五日又重校點了　円弁」

〔巻第十八〕

（奥書）（別筆）「寛喜元年九月十一日／點交了／比丘高信」

交了

〔巻第三十四〕

（奥書）（別筆）「校了

寛喜元年九月十七日於竹内之房以御堂之本／重交之畢／并難字付假字了／小比丘了弁」

「校了」（以上二字擦消）（「校了」ノ字ハ「寛喜元年」ヨリモ以前ノ字ナリ）

〔巻第三十六〕

（奥書）交合了　親玄

（別筆）「校了」

これらの巻の内、巻第三・十八・三十四には寛喜の年記がある。

しかし、奥書に見られる僧侶名は、巻第三・圓辨、巻第十八・高信、巻第三十四・了弁、巻第三十六・親玄であり、特定の個人に固有の加点態度の反映とは考えにくい。

これらの加点がすべて寛喜のものと考えた場合、巻第三から巻第三十六までであることから、共同で校合加点作業を行なって行くに当たっての加点規準が、『音義』にない字にまで加点するか否かについて、初期の段階において不統一であった可能性がある。

あるいは先に述べたように、巻第三には嘉禎の年記のある奥書があり、その記述によると円弁によって「重校點」されていることより、『音義』にない朱声点加点字はこの時の加点とも考えられる。また、他の巻の音義外の朱声点加点字も、同時期のものと考えることもできよう。しかしそうであったとしても、多数の音義外朱声点加点字を持つ巻は多く

ないことから、嘉禎の「重校點」はすべての巻に亘っての詳密なものではなかったと考えられる。

次に、墨声点の上に朱声点を重ねて加点した字のある巻について見る。墨の声点の上に朱の声点を重ねて加点した字のある巻に巻第六・巻第四十五・巻第七十八がある。このうち、巻第四十五は朱墨声点加点字は二例とごく少数であるが、巻第六と第七十八には多く見られる。これらの朱墨声点加点字について『音義』と対照させてみると、〈表2〉に見られるように、ほとんどすべての字が音義字であり、また巻第六と第七十八では朱墨点以外の声点の加点された字はごく少数である。

このうち巻第七十八には次の様に寛喜の年記があり、長円の名が見られる。

〔巻第六〕

（奥書）以御堂之八十經本交合了

（別筆）「一校了」

〔巻第七十八〕

（奥書）寛喜元年九月五日校合畢　長圓

（別筆）「一校了」

しかし、長円の名の見られる他の巻には朱墨声点加点字は見られない。先に述べたように、巻第六と巻第七十八とは加点時期が接近していたものと考えられ、共同で校合加点作業を行なって行くに当たっての加点規準が、声点を朱で加点するか墨で加点するかについて、初期の段階において不統一があったことの反映である可能性がある。

### 三・二　点本と音義における加点の差異に基づく検討

次に、『音義』にある字で字音振り仮名・声点に有無あるいは差異の見られるものについて見る。先ず、振り仮名・声

点いずれかの有無に関する用例についてみる。

『音義』と『点本』とで振り仮名・声点いずれかの有無に関する違いのある巻および用例数は〈表3〉の通りである。表中（　）に囲まない数値は『点本』にない用例数である。一方（　）に囲んで示した数値は、『音義』にない用例数である。

〈表3〉

| 巻次 | 振仮名 | 声点 |
|---|---|---|
| 一 | 1 | |
| 十一 | 1 | |
| 十二 | 9 | 2 |
| 十八 | 1 | |
| 二十一 | | 2 |
| 三十四 | (2) | |
| 四十一 | 1 | |
| 四十五 | | 7<br>(2) |
| 四十八 | 1 | |
| 五十八 | | 4 |
| 五十九 | 5 | |
| 六十四 | | 2 |
| 六十八 | 1 | 1 |

次に、声点の差異に関する用例について見る。まず、声点の単点と双点の違いに関する用例は次のものである。

〔点本の用例〕

奮(朱墨平)フン迅(朱墨平)□ン（巻第六・一二八行）

悋(平)リン惜(入)シャク（巻第三四・三三九行）

瞻(平)セム覲(平)キン（巻第四八・四六一行）

頑(去)クワン很(上)コン（巻第五八・三四三行）

欣(墨平濁)コン慰(墨平)ヰ（巻第五九・七三行）

菡(去)カム萏(平)□ウ（巻第六〇・一〇九行）

〔対応する音義掲出字〕

奮(平)フン迅(平濁)シン　私閏反

悋(平)リン惜（入濁）シャク

瞻(平)セム覲(平濁)コン　渠鎮反

頑(去濁)クワン很(上)コン　五還反

欣(平)コン慰(平)ヰ　許斤反

菡(去)カム萏(平濁)タウ（左側朱筆「タン」）胡感反

このうち加点第二字目の声点に差異があるものは「奮迅」「悋惜」「瞻覲」「菡萏」である。このうち、連濁した語形を取るか否かの反映と見られるものは、「奮迅」「悋惜」である。[7]「瞻覲」は漢音読「キン」と呉音読「ゴン」の違いと見られる。「菡萏」の「萏」字は『音義』では左側に朱の後筆で「タン」と訂正されている。「萏」の振り仮名一字目は虫損のため不明であるが、「□ウ」であるから誤解に基づく異なった字音に対する声点とも考えられる。

加点第一字目の声点に差異のあるものは、「頑很」「欣慰」である。「頑」は漢音「グワン」と考えられる。また「欣」は呉音「ゴン」と考えられる。それぞれ『音義』『点本』で単点が加点されている理由は不明である。

次に、声点加点位置の違いに関する用例は次のものである。

〔点本の用例〕

校(墨去)ケウ飾(墨入軽濁)シキ（巻第六・一四八行）

覲(平)キン謁(入)エツ（巻第一七・四五三行）

〔対応する音義掲出字〕

校(去)ケウ飾(入濁)シキ

覲(平)キン謁(入軽)エツ　於歇反

尼(上)ニ咤(平軽)タ（巻第二二・一八三行）　尼(上)ニ咤(平)タ　竹嫁反

珂(上)カ貝(平軽濁)ハイ(擦消ノ上)（巻第三四・三四一行）　珂(上)カ唄(平濁)ハイ

妻(平)サイ妾(入)セフ（巻第三四・三四三行）　妻(平)サイ妾(入軽)セフ　士接反

璧(入軽濁)ヒヤク(漢字・声点・振仮名トモ擦消ノ上)玉(入軽濁)クキヨク（巻第三六・B一七二行）　璧(入濁)ヒヤク玉(入軽濁)クキヨク　比亦反

声点加点位置の違いに関わる用例はすべて平声重と平声軽、入声重と入声軽の違いに関する例である。このうち明らかに漢音読と見られるのは「覲謁」である。漢音では切韻系韻書における入声全清・次清・次濁が入声軽と対応するとされている。[8]「謁」は韻鏡では入声全清字であり、漢音で入声軽になるべき字音である。『音義』では入声軽であるが、『点本』では入声である。

これ以外の用例は呉音読と見られる。まず、呉音入声軽の用例について見る。呉音入声軽の出現は前接字が上声か去声の後となることが、指摘されている。[9]用例の内「校飾」は前接字去声である。『音義』で重であるが、『点本』では軽声点が加点されている。一方、「妻妾」は前接字平声である。『音義』では軽であるが、『点本』では重声点が加点されている。なお、「璧玉」は第一字目が入声軽となっているが、理由は不明である。一方、呉音平声軽の出現の規則性については、不明とされている。[10]

次に、振り仮名によって示される字音仮名音形の違いに関する用例は次のものである。

〔点本の用例〕　〔対応する音義掲出字〕

僉(朱墨平)ケム然(朱墨去)ネン（巻第六・三三六行）　僉(平)セム然(去)ネン　七塩反

羯(平)コム磨(平)マ（巻第一七・三一行）　羯(平)コン磨(平)マ

瞻(平)セム覲(平)キン（巻第四八・四六一行）　瞻(平)セム覲(平濁)コン　渠鎮反

盈(去)ャウ洽(入濁)カウ（巻第五九・二九一行）　盈(去)ャウ洽(入濁)カフ　下音狭

このうち、「僉然」の「僉」は呉音「セム」と考えられる。字形の類似に基づく誤解による振り仮名と考えられる。「羯磨」は梵語の音訳語で、連声の「コムマ」が正しい形で「コンマ」は連声としては誤形である。「瞻覲」は先にも指摘した通り、漢音読と呉音読の違いと見られる。「盈洽」は「洽」は声点からも分かるように入声韻尾字であり、唇内入声韻尾が母音化した音に引かれての表記と考えられる。

以上のように、『音義』にある字で、声点・振り仮名に有無あるいは差異のある用例はごく少数である。よって、これらの用例だけからでは、『音義』と『点本』とで漢字音認識や加点態度に系統的な差異があったか否かは明確にできない。全体としては、『音義』を参照しつつの加点作業においては、『音義』に示された漢字音に忠実に加点されたものと見ることができる。

次に、目移りによる誤写と考えられる用例についてみる。

〔点本の用例〕　〔対応する音義掲出字〕

階(墨去)カイ砌(朱墨平)マン(右側薄墨セイ)（巻第六・一五三行）　寶(平)ホウ鬘(去)マン　〔一行前〕

花(朱墨平)□ヱ叢(朱墨平)スイ（巻第六・一六九行）　華(上)クヱ蕊(平濁)スイ　〔一字前〕

それぞれ『音義』において「階砌」は一行前に「寶鬘」、「花叢」は一語前に「華蕊」がある。それとの見誤りによる誤写と考えられる。

このような誤写があることによって、正に『点本』が『音義』を見ながら加点されて行ったことが確認される。

## ま と め

以上、『新訳華厳経寛喜元年点』の僚巻推定について、加点字の面から検討を加えた。その結果、調査し得た巻につい

ては、沼本氏・奥田氏の推定が概ね妥当なものと推定された。

具体的には、朱声点加点字は字音振り仮名も含めてほとんどが音義掲出字に一致し、一方、墨声点加点字は字音振り仮名も含めてほとんど音義に見られないということである。『点本』は奥書によって、寛喜に『音義』を参照しつつ加点されたものであることが知られ、右に述べたことより、朱声点加点字のある巻は寛喜に加点されたものとして僚巻と推定される。これらの巻の中には更に墨声点の加点された巻があるが、これらの墨声点は、加点状況から見て、朱声点より後に加点されたものと考えられる。

また、例外的な巻として、墨声点のみ加点された巻第五十六は、音義外字も多く、また点本外字も多いことより、『音義』を参照しつつ加点されたものとすることには疑問がある。一方、墨声点の上に朱声点が重ねて加点された字の多い巻第六・七十八についてみると、ほとんどの字が『音義』にある字であり、声点・振り仮名ともに一致することより、寛喜に加点されたものとして扱ってよいものと考える。また、朱声点加点字の多くが音義外字である巻三・十八・三十四・三十六についてみると、点本外字はほとんど見られないことから、『音義』を参照しつつ加点した上で更に多くの字に朱声点を加点して行ったものと考えられる。

今後、未調査の巻について調査を進めるに当たっては、声点の種類の違いに留意する必要がある。また字音の性格について考察を行なうに当たっては、経緯の異なる加点のあることを考慮しつつ考察を進める必要があるものと考える。

注

(1) 沼本克明「高山寺蔵字音資料について」(『高山寺典籍文書の研究』高山寺典籍文書綜合調査団編　昭和五五年一二月　東京大学出版会)

(2) 同右論文

(3) 同右論文

（4）同右論文
（5）奥田勲「高山寺現蔵大方広仏華厳経一覧稿」（昭和六〇年度高山寺典籍文書綜合調査団　研究報告論集　昭和六一年三月　高山寺典籍文書綜合調査団編）
（6）高山寺資料叢書第五冊　高山寺典籍文書綜合調査団編　昭和五〇年三月　東京大学出版会
（7）漢字音の推定には次の資料を用いた。呉音資料「法華経単字」「法華経音訓」「観智院本類聚名義抄和音注」・漢音資料「長承本蒙求」「興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点」また、清濁については韻鏡を参照した。
（8）沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』第二部第四章　漢音に於る声調の諸問題（昭和五七年三月　武蔵野書院）
（9）沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』第一部第四章第二節第二項　呉音に於る軽声に就て（昭和五七年三月　武蔵野書院）
（10）同右論文

［付記］本稿を成すに当たり、資料の閲覧・調査に関して、高山寺小川千恵御住職を初めとする高山寺御当局の方々の御高配を賜った。また、築島裕先生・小林芳規先生を初めとする高山寺典籍文書綜合調査団の方々には、様々のお導きを頂いた。記して深謝申し上げる次第である。
なお、本稿は平成七年度鎌倉時代語研究会夏期研究集会における口頭発表に基づいて成稿としたものである。研究集会においては、小林芳規先生・沼本克明氏より有益な御示唆を頂いた。記して学恩に謝意を表す次第である。